お寺を訪ねていただいた皆様

◆東北大学医学部教授　中里　信和　氏

小友町柳沢出身で仙台市在住の中里信和先生が、仙台での学会終了後、各国の先生（医師）の皆様と共に華蔵寺を訪ねて下さいました。

◎学会を終えて「ふるさと」ケセンへ

私が中学卒業とともに家を出てから、すでに四十余年になります。大船渡線で帰省した学生時代よりは、新幹線や高速道が使える今のほうがはるかに便利なのですが、日々の忙しさを言いわけに、また父母が他界したこともあって、帰省の頻度はますます減り、小友（檀家）の皆様にも御無沙汰続きの昨今です。

国際学会参加者（於 仙台市）

現在、私は東北大学にて「医療・教育・研究」の三職を兼任する立場にあります。昨年（平成二十九年）五月、縁あって国際学会を主催する機会を頂戴しました。学術的な行事だけでなく、友好を深める行事もと考えまして、思い切って招待客を故郷に連れていく企画をたてました。震災で大きな被害を受け、町も人の心も傷つきながらも懸命に復興に向けて立ち上がろうとしてる故郷の姿を見てほしいと思ったからです。朝六時に集合し、仙台からケセンを目指しました。

バスの中では、佐藤文子氏（米国在住十五年の経験をもつ心理カウンセラーで、震災後、陸前高田市で三年間の活動）や、白石秀明氏（盛岡市出身で北海道大学に所属する小児科医。震災後は気仙町で医療支援を実施）による震災当時の経験談が語られました。午前中は、唐桑町津波体験館、高田町「りくカフェ」、高田一中仮設住宅等をまわりました。キャピタルホテルでの昼食時には、仮設住宅の方々による「御祝（ごいわい）」の演舞がありました。その後、普門寺を訪れ、震災当時の話をうかがい、また佐藤文子氏が主導して作られた五百羅漢と一緒の写真撮影も行われました。

中里医師と畑山住職

そして、最終訪問先が華蔵寺でした。まずは庫裡にて温かいお茶を頂戴し、祥山和尚さんによる法話と坐禅体験がありました。参加者全員、学会の学術行事以上に真剣な表情でした。当初の予定はここまでしたが、和尚さんによるサプライズがありました。本堂においての読経と御焼香です。和尚さ

んより「津波で亡くなられた方への気持の表し方には、決まった型はありません。皆様それぞれの方法で結構です」というお言葉がありました。実にさまざまな宗教の参加者がいたのですが、皆、丁寧に御焼香を行い、手を合わせて下さいました。和尚さんからの最後の挨拶は、「震災後、世界中からあたたかい御支援を頂戴しました。皆様にすぐに何かをお返しすることはできませんが、直接その方でなくても、だれかに少しずつでも返していければと思っています」というものでした。通訳していた私は、恥ずかしながら言葉につまり、かわりに白石氏が通訳を続けてくれました。

手を合わせて心を一つに

最後にハプニングもありました。帰路につくバスに一名、戻らないのです。ベルギーのX先生です。お寺の高い所にある墓地のまん中に、ひとりで立っているではありませんか。私は瞬間、警策でピシリとやられたように感じました。近くには、私の父と母の墓があったのです。X先生を迎えに行って父と母とに紹介し、墓に手をあわせることができました。そのまま立ち去ろうとしていた私に、父と母は何かひとこと、言いたかったに違いありません。

私にとっての華蔵寺は、手入れの行き届いた境内やお堂で静謐な時間を過ごせる場所であり、ふるさとの話をうかがえる場所でもあります。また、いつも自分の今を振り返り、この先のことを考える最高の場所でもあります。訪問先でお世話になった皆様、ガイド役の佐藤文子氏と白石秀明氏、そしてツアーの最後を締めて下さいました畑山祥山和尚さんに、心より感謝申しあげます。

中里 信和（柳沢／仙台市）

厳美小学校のみなさん

一関市立厳美小学校の六年生二十一人、引率の先生二名が十一月六日、「東日本大震災から学ぶ」という震災学習の一環で、華蔵寺を訪ねてくれました。

以前、小友小学校に勤務されていた鈴木宏昭先生とのご縁で、この機会をいただいたと思っています。震災発生の時は、まだ就学前だった六年生のみなさんが、真剣に当時の話を聞いてくれました。

また、一人ひとりから、丁寧な字で、感じたことや自分の考えを書いた手紙をいただきました。ありがとうございます。